NEWS LETTER
# ふたば便り
Vol.8
2009年2月1日発行

## 「漂流」への意志、ふたたび

諏訪哲史

川上音二郎と貞奴、江戸から明治への移行期・転換期には、この二人の、有名な海外逃亡未遂・海上漂流事件やら、その後の渡米やら渡仏やら、凄まじい波乱万丈のスペクタクルが現実に繰り広げられ、彼らがその流浪の果てに生み出した、やみくもともいえる舞台芸術(総合芸術)の中から、演劇・文学・音楽(音二郎のオッペケペー節は海外での日本人初のレコード音源となった)が派生していった。

その貞奴が晩年を過ごした文化サロンの先駆け、ここ二葉館は、地元名古屋の諸芸術を一世紀近くにわたって、ひっそりと見つめてきた。

名古屋近辺は元々が坪内逍遥や二葉亭四迷もいた、文学にゆかりの土地柄だった。童話作家の新美南吉は半田、僕の敬愛してやまない詩人の金子光晴は津島、シュルレアリスムやダダイズムを紹介した山中散生や、それを日本で実作した詩人春山行夫は名古屋で生まれ、あの江戸川乱歩も少・青年期を名古屋で過ごした。最近では、作家の城山三郎、歌人の春日井建も永く地元在住者だった。

総じて前衛的、進取の精神に富み、日本でいち早くモダニズム建築も取り入れた、新しもの好きの名古屋の気風…。

ただ僕自身はこうした「名古屋文学」気質なる幻想を、本当のところ、決して地理的な必然とは思っておらず、平成19年どういうわけか地元出身の文学賞受賞者が相次いで出た現象にも、当事者のひとりでありながら、単に偶然の産物だった、と幾分冷やかに静観している。

風土が文学者に影響する度合いにも当然ながら限度がある。例えば、

ではある。だが、その言語の異物感を「他者」として認識・対峙し、それに全霊で抗えるか否か、そして、その抗いが自分自身をも変容させうるかによって、各人の言語感覚に大きな差異が生まれてくる。

偉大なる先人たちも、それぞれがどこかで「他者」と出会っているであろう。海外で、あるいはここ名古屋で…。つまりは場所ではないのだ。

僕自身の言語への執着は、デビュー作『アサッテの人』に顕著なように、幼少期にかかった重い吃音癖に端を発している。

人が詩人・小説家となるのは「他者」と出会った時であり、僕の場合「他者」とは吃音だった。

確かに名古屋は東西の中間に位置し、言語的・文化的な潮の合流点どの場所においても「他者」との接触は起き、どの場所においても、その人の人間の内部において「文学」は発生する可能性をたえず秘めている。

しかし、たとい出会っても、そのままずれ違えばそれは「他者」ではない。名古屋は文化的な好立地にありながら、その衝突を無意識の裡に永く避けてきたきらいがある。

文学の分野に限らず、現在の名古屋に欠けているのは音二郎と貞奴の企てた、向こう見ずな「漂流」への意志である。人生の最大の価値を安定・安住に置きがちなこの地の人々は、精神的にも、また現実的にも冒険を好まない。たえず賭け金を一定以上残しておきながらの、安全な勝負にしか手を出したがらない。それゆえ、丸裸の全敗に陥ることもなければ、反対に全勝、文化的栄光の頂をみることもまた、永久にない。そして、不思議なことに、そのことを名古屋人は実はたいへんによく自覚しており、いつの日か「名古屋の時代」が来るなどという世迷いごとを一切信じない冷徹な本音を心に隠しつつ、そとづらでは愛想笑いさえできる「いい人」になってしまった。

貞奴らのおこなった昔日の溺死覚悟の「漂流」など、今のぬるま湯の名古屋には望むべくもない。名古屋はかつての貞奴の持っていた気概を忘れ、ひたすら内向化し、良くいえば謙虚、悪くいえば卑屈なうすら笑いに、いつのまにか慣れてしまった。

「漂流」への意志、「他者」との対峙を恐れぬ強靭なかつての名古屋の進取の精神が、いっそう現代の我々に求められているのではないか、そんなことを僕は思う。

※この文章は、平成20年7月23日から9月7日まで開催された文学展示企画「なごや発!文学は今」に諏訪哲史氏が寄稿されたものを再録しました。

# 2009 EVENT SCHEDULE

## 「ふたばの日」文化のみち二葉館 名古屋市旧川上貞奴邸 開館四周年記念　平成21年2月8日(日)

文化のみち二葉館では、2005年の開館日である2月8日が施設愛称の「二葉」と語呂が合うことから、「ふたばの日」としています。開館4周年を迎える今年の「ふたばの日」には、入館無料をはじめ、さまざまな記念イベントが開かれます。
また、この日は開館時間の延長も行われます。宵闇に輝くステンドグラスの美しさも、合わせてお楽しみください。

・日時:平成21年2月8日(日)
　10:00〜19:00
・当日入館料:無料
・来館先着28名様に「文化のみち二葉館年間パスポート券」プレゼント　10:00〜

### ◆〜夢枕〜 川上貞奴の映像公開
・終日公開(2階和室1)

### ◆川上貞奴関連パネル特別展示
・終日公開(2階和室2)
※いずれも貞照寺所蔵

### ◆来館者参加イベント 〜桜〜　柳瀬辰久氏(画家)
・10:00〜12:00(1階集会室)
ご来館の方に思いをしたためた一筆を筆入れをしていただいた後、画家・柳瀬氏が　加筆、一幅の絵を完成させます。ご来館の記念にぜひご参加ください。
・筆入れ:当日午前中
・当日16:00頃柳瀬氏の加筆経過の作品を展示します。
・後日加筆完成作品を柳瀬氏の作品と共に展示公開します。
・3月3日(火)〜8日(日)
　10:00〜16:30(最終日は15:00まで)

柳瀬辰久氏

### ◆1DAY書庫棟公開
・15:00〜17:00
・普段は未公開の蔵書書庫棟を見学公開します。

### ◆『未青年』とその時代展 春日井建と仲間たち
・2月3日(火)〜3月8日(日)
『未青年』の序文で三島由紀夫から「若い定家」と絶賛された歌人春日井建を、友人たちとの交流や時代背景とともに紹介します。

### ◆春競う!甚句の賑わい! 川上貞奴に捧ぐ〜貞奴甚句〜献上
・13:30〜14:30(1階大広間)
名古屋の伝統音楽正調名古屋甚句は、名古屋で文化年間(1810)頃に唄われはじめ、明治9年(1876)頃に流行した伝統芸能です。開館一周年記念日よりご協力をいただいている「正調名古屋甚句を拡める会」(代表・甚富華こと、華房真子氏)の作詩・作曲による「貞奴甚句」が完成しました。情感あふれる世界をお楽しみください。

華房真子氏(甚富華)

### ◆矢野優雪&その仲間による「春らんまん〜文化財とくらしの書」展
・3月10日(火)〜15日(日)
　10:00〜16:30(最終日は15:00まで)
・2階和室1・2
書を暮らしの中で身近なものとして感じ、また身近にある素材に(扇、額、うちわ、陶板、炭など)遊び心で好きな書を書いてみる。雅に暮らしの中の実用書道を展示いたします。

## 文化のみち情報BOX

### 徳川園……イベントのご案内
■お問合せ　名古屋市徳川園管理事務所
　TEL　052-935-8988

#### 冬牡丹の展示
わら囲いをした冬牡丹を庭園内に展示します。春の華やかさとは一味違った牡丹の美しさをお楽しみください。
■1月2日(金)〜2月22日(日)9:30〜17:30
　月曜休園(祝日の場合はその翌日)
■徳川園内「牡丹園」及び蓬左文庫前

#### 早春の徳川園 3月15日(日)無料開園
早春の花々が咲く徳川園。当日は楽しいイベントも予定しています。
■3月15日(日)9:30〜17:30

### まちの縁側MOMO イベントのご案内
お問合せ　まちの縁側MOMO
TEL&FAX　052-936-1717

#### エンガワ絵本展
■3月3日(火)〜3月27日(金)
　13:00〜17:00　土・日・月休み
■参加費　無料
●関連企画として15日(日)14:00〜
　「延藤安弘　絵本幻燈会」を開催
　参加費は一般の方のみ1000円

#### MOMO 手作りレンタルボックス展
出店者募集中!
■4月1日(水)〜30日(木)
　13:00〜17:00　土・日・月休み
■参加費
　1ボックス(約35cm×35cm)　2000円
　＊作品は販売、展示のみいずれも可

### 文化のみちワークショップ2009
■テーマ　「どうなる、どうする!文化のみち」
■3月14日(土)13:00〜17:00
■名古屋市市政資料館第3集会室
　名古屋市東区白壁1-3
　TEL 052-953-0051
■お問合せ
　文化のみちワークショップ実行委員会
　090-8860-4484
　bkescape2003@gmail.com

NEWS LETTER
ふたば便り Vol.8
発行日　2009年2月1日
発　行　文化のみち二葉館
【名古屋市旧川上貞奴邸】
〒461-0014 名古屋市東区橦木町3-23
TEL&FAX　052-936-3836
http://www.futabakan.city.nagoya.jp

※この冊子は、古紙パルプを含む再生紙を使用しています。